

## 1、はじめに

ここに一冊の画集があります。『あさやけをみにゆこう』と言うタイトルが付いています。8才6ヶ月というあまりにも短い生涯を精いっぱい生きた白井雅世ちゃんの画集です。白井雅世ちゃんは、ハンデキャップを持って生まれ、その病気と闘いながら明るく活発な学校生活を送っていましたが、今年の2月21日他界しました。

クラスの子どもたちによる『あさやけをみにゆこう』の合唱が葬祭場に響きました。雅世ちゃんを送る子どもたちの歌に新しい涙を誘われて祭壇を見上げると、雅世ちゃんの笑顔がそこにありました。「歌ってくれてありがとう。私もいっしょに歌っているよ。」と微笑んでいるようでした。雅世ちゃんが亡くなる数日前、学校の歌の会で発表する合唱をテープに吹き込んでベットに横たわる雅世ちゃんに聞かせたとき、すでに意識の亡くなっていた雅世ちゃん口がかすかに動き、歌を口ずさんだと言うことです。きっと、子どもたちの歌声が雅世ちゃんの命の日を燃え立たせたのでしょう。

雅世ちゃんは特に絵が好きで、たくさんの作品を残していました。8才の誕生日に生活勉強でつくった絵本に、「はっさいのけつい。おおきくなったら げいじつかに なりたい。それがわたしのゆめです。」と書きました。クラスのおかあさんたちが相談して、何とか画集にしたいと立ち上がりました。予算の都合で、まず、『まあちゃんの夢はがき』を作製し販売しました。新聞でも報道され、瞬く間に版を重ねました。そして、1年足らずの間に、まあちゃんの夢画集が完成したのです。

朝焼けの空が鮮やかに描かれた「むくどりのゆめ」の表紙。清楚で美しく、しかも重厚さを与えてくれる表紙の絵に誘われて、思わず手にとって1枚1枚見ているうちにまあちゃんの絵の世界に引き込まれてしまいました。

なんとすごい感動を与えてくれるのでしょうか。「としこしぞばたべたよ」「わたしがすみたいうち」「おふる」・・・表現の温かさにうたれます。

「あめふり」「たんぼぼ」「しろつめくさ」・・・とページをめくって行くうちに、まあちゃんと過ごした学校生活が走馬燈のように浮かびます。私は、まあちゃんと『お料理名人』で1年間いっしょでした。秋のお団子づくりを思い出しました。不自由な手で上手に団子をこねていました。

そして、「てぶくろ」「スーホの白い馬」・・・なんとすばらしいのでしょうか。どうして、

こんなにも人の心を動かす表現ができるのでしょうか。画集から受ける感動を、私はどう言葉で表してよいかわかりません。

全校朝の会で、画集のすべてのページを子どもたちに紹介しました。主治医の石本先生と担任の佐藤先生とお兄ちゃんの作文を読みました。

「あなたはもうすでに人々の心を楽しませ、なごませる力を備えた芸術家だったのですよ。ありがとうまあちゃん。」という石本先生の結びの文章を読むと、自然に、同級生だった3年生からまず拍手がおこり、それが体育館いっぱいの全校生徒に広がりました。

雅世ちゃんは、どのようにしてこんな力を付けてきたのでしょうか。幼児期から絵を通して関わってきた美術科担当教師、伊東信治先生は画集の1枚1枚の絵に関わる人間発達のドラマを紹介しながら、最後に次のようにまとめています。

「つまり、雅世ちゃんは特別な子どもではなかったと言いたいです。家族の深い愛情に包まれて育ったその子が、あるきっかけから自分に自信を持ち、教師の積極的な励ましや働きかけの中で、また仲間たちに認められる中で、驚くほどの人間的成長を遂げ、自分のアイデンティティをつかみ、「げいじつかになりたい」という夢を抱くまでになる……。そのことに私はかけがえのない、子どもの持つ可能性の豊かさや素晴らしさを何よりも強く感じますし、教育という営みのすばらしさや、集団の中で育ち、学び合うことの尊さを思うのです。」

『あさやけをみにゆこう』は、すばらしい教育書でもあるな、と圧倒されました。人間の輝きとは何か、教育とは何かを教えてくれるのです。今、日本の教育に失われている『子どもたちの輝きと希望の教育』がここにあると思うのです。子どもたちが輝き、希望が胸に刻まれる学校の創造が、今、求められているのではないのでしょうか。

## 2、今、子どもたちは

### (1)日本の教育状況

1995年は大きな事件の連続で事件に目を奪われることの大きかった年でしたが、教育の面からも吟味していかなければならない出来事がたくさんありました。

日本の教育の病理が、誰の間から見ても歴然としているのが昨今の特徴です。

大河内清輝君の自殺からちょうど1年目に起きた、上越市立春日中学校1年生の伊藤準(ひさし)君のいじめによる自殺は、この問題が深刻で改善の兆しが見えていないことを私たちに突きつけています。準君から数日おいて千葉で中学2年生の鈴木照美さんが遺書を残して自殺しました。清輝君から準君までの1年間に11件の自殺があったといいますが、報道で大きく取り上げられることもなく過ぎてきています。能力主義と管理の学校で、

やり場のないストレスにいらつき、傷つけあっている子どもたちの姿に多くの国民が心を痛めています。

地下鉄サリン事件を引き起こしたオウム真理教の信者たちの姿は、教育の側面からとらえても多くの問題を投げかけています。「なぜ、あのような高学歴の若者が信者になり、しかもあのような事件を引き起こすのか？」と問題を立てて日本の教育の問題点を指摘する人がいる一方、もう一方には「高学歴だからこそ、入信するし問題も起こす。」と現代の教育を受ければ受けるほど生活に立脚した人間的で科学的な真実が見えなくなることを指摘する人もいます。いずれも、教育が生きることと遊離してしまったと見ている点では共通しています。

教育の病理は、権力の側にとっても放置できないものになってきています。国際競争力をつけ世界の中での地歩を確立させたい経済界は、教育への提言を積極的に行っています。中でも注目を浴びたのが経済同友会の「学校から合校へ」という提言でした。何でもかんでも受け入れている日本の学校の役割をもっとスリム化し、「基礎基本を徹底する学校」を中心にその周りに「自由研究学校」と「体験学校」を配置し、3つの学校が連携をとって教育を進めるシステムを作ると言うことになっています。今までの学校は基礎基本の指導に責任を持つ学校として役割を果たすこととなります。すべてを背負い込んでいる現場教師からすると、学校のスリム化は魅力的な標語です。しかし、経済界の経営戦略に位置づけてとらえると手放しで評価できません。労働者の終身雇用制をなくしたり、学校での飛び級の導入が考えられていることなどを考えると、スペシャリストとゼネラリストを種分けしてそれぞれが生き甲斐を持って生きるという中曽根政権時代の臨教審路線上の政策の具体化と見るのが正しいといえます。「学校五日制」を軸にして教育改革の検討に入った第15期中教審は、臨教審路線、経済界路線を教育に具体化する役割を果たしているだけだという捉え方が必要でしょう。

日教組は、文部省との「歴史的和解」を大会決定しました。先日、経済界との教育シンポジウムを開き「学校から合校へ」の具体化待望論を表明しました。この道は、「和解」と言うよりは「屈服」という方が正しい言葉の使い方のように思います。

こうした中であって、若者の輝きを見ると未来への希望を確信することができます。阪神大震災の時、全国から多くの若者がボランティアとして神戸に集まり社会的な役割に充実感を持って学校に帰っていきました。また、川田龍平君がH1V感染者であることを表明して裁判に立ち上がったことを契機に、その運動を支援する青年たちのボランティア活動への参加が急速に広がっています。和光の高校生も多く参加していると言います。社会との接点を持つことによって、青年たちは急速に本来の力量を發揮しているように思いま

す。

## (2)子ども

### 人間関係の不器用さ

散歩の時、隣の子どもを殴ったりお腹にパンチを入れたりし、上級生が「何やっているの？」と声をかけると、「うるっせいなー、おめーにはかんけえねえんだ」といったりするような、殺伐とした人間関係をとる。それでいて、言いなりになっていた周りの子どもたちが負けないで言い返すようになると、とたんに家に帰って親に甘えたり、仲間からはずされていると訴えたりする。友だちといっしょに遊びたいのに関わり方が不器用で相手に嫌われる。このように、友だちに攻撃的な反面相手から何かされると傷つきやすくてもらい子どもが増えているように思えます。

現代のような少子化社会では、人間関係づくりの不器用さはそう簡単に克服されず、不器用さを引きずりながら成長していくこととなります。3年生のクラス替えの時の子どもたちの不安定さの原因はそこにあるように思います。担任教師に反抗する子どもも現れますが、それは、幼児的な独占欲の裏返しのように見えることが多くあります。

### 「知」と行動のアンバランスな子

超早期教育の進行の中で、言葉だけの「知識」はあるが実際の事柄は全く知らない子どもとか、語彙の量と生活行動があまりにもアンバランスな子が多くいます。

テントウムシの学習の導入に、子どもたちは記憶をたどって予想の絵を描くことになりました。「テントウムシの背中にはいくつ星があったかな？」と先生。それまで、「テントウムシなんか見たことない。」といていたA君は、先生からテントウムシを借りていましたが、それを詳しく見ることもせず、「10こです。どうしてかという、テントウムシだから。テンは10だから。」「トウも10だ。」といいました。ほかの一年生は、なんのことか通じないのでポカンとして相手にもしません。

1年生に入ったばかりの子どもが、「先生早く勉強しよう。わたし、 $45 + 23$ 知ってるよ。」と計算を始めました。知ってる知らない、できるできないでの競い合いが幼児期から熾烈に展開されていることがつかめます。昨今の子どもたちは教室での「間違い」を極度におそれます。授業中にできないことが理由で泣く子が年々増えてきているように思います。

### 「友達づくりの時代」の葛藤

家に遊びに行ったとき友だちのコインをとったと言われたことがきっかけで、学級の力のある子から「ふけつ」「しらみ」といじめ続けられている女の子。そして、いじめている

子同士の中でのヘゲモニ - 争い。下校の時、同一方向に帰る3人の女の子の中での”外した””外さない”の対立。いつもいっしょの二人だったはずなのに、ある日、別の友だちととっても仲良く話していた場面を見たことが原因で壊れてしまった関係。

私的な仲間づくり、仲間外しなどを原因にした友達づくりの葛藤が意識化されるのが、9歳、10歳の頃の特徴です。人間関係づくりの無器用さをひきずって少年少女期に入った子どもたちはさまざまな葛藤を抱えて学校生活を送っています。学級での公的な生活には現れない、私的で閉鎖的な友達関係が学級集団の雰囲気水面下で支配しているとき、教師はどのように子どもたちの関係を変えていったら良いのか、大きな実践上の課題です。

子どものジグザグにつきあえない母子一体型の子育て

「友達づくり」でも、「知識獲得」でも子どもの発達にはジグザグなものですが、それに上手につきあえなくなっているのが昨今の親の特徴のように思います。子どもたちの葛藤に一体化してしまって、子どもになりかわって立ち上がる親が多くなっています。それが、トラブルをいっそう複雑にするという、教師の声が伝わりにくくなっているのが現状です。

また、学力定着にも過敏で、1日でも休むと「家で教えるから使ったプリントを持たせてほしい」とか、「教えたことはきちんと覚えるように徹底してほしい」と教師に迫ります。学力定着の課題は当然のことです。しかし私たちはそれが過敏すぎないかと感じているのですが、伝わらない親が増えてきているのも昨今の特徴です。

癒しの教育を

障害を持った子どものお父さんが、子育てを交流しているとき、「家の子は『がんばれ』といわれるのが一番嫌いなようです。表情が曇るんです。私ははっと気づいたんです。子どもはいつもがんばっているんですね。がんばっているのにできないなと、子どもはいつも思っていたんですね。」と話しました。

子どもの今ある姿を、まず丸ごと受けとめ承認することです。これは、子どもだけでなく、親も教師も基本的には同じことのように思います。過密労働、超早期教育、受験競争、教育産業の繁栄、本当に余暇などという言葉の入る余地の無い世の中です。癒し、癒されの温かい人間関係を土台にした、人間的な暮らし、人間としての発達を何よりも大切にしたいものです。

### 3、今年の課題

和光鶴川小学校は開校4年目の学校です。開校以来、子どもの発達のリズムにあった『下から創る教育課程』づくりを進めてきました。2年目の第1回公開研では、『どうする低学年教育』というテ - マで、低学年の発達と教育とりわけ生活勉強の内容と方法を深め

てきました。

昨年の第2回公開研では、3年生までの学校ができた段階で、中学年期の教育実践課題を明確にした教育課程を編成することを目指して「少年少女期の教育課題」というテーマを設定しました。基調報告では少年少女期の教育課題を次の4つに整理して報告しました。

不思議の時代から冒険の時代へ やる時代から見通してやる時代へ

知識の時代 友達づきあいの時代

今年度の第3回公開研は『学び』ということに焦点を絞り込むことにしました。それには二つの理由があります。一つは、昨年の課題を深めるということです。「不思議の時代から冒険の時代へ」とか「知識の時代」と少年少女期を特徴づけましたが、子どもたちはどのように知の世界に入り、どのように知を獲得していくのかということについて、実践の検証例がまだまだ希薄でした。3年生までの子どもしかいない学校の限界があったと考えています。子どもの『学び』がどのように発展するか、探りたいと考えました。

もう一つは私たちの教育課程づくりの課題と関わっています。

昨年から、私たちは、和光小学校と鶴川小学校と両校合同で新しい教育課程づくりの作業に取り組んできました。1995年度は、その構想を父母に示し、説明会やトク集会を繰り返してきました。教育課程改訂は「学びの改革」を進めることを軸に行事や生活時程、情報化・国際化への対応、学校完全五日制の実施等を内容としています。

和光両小では、「子ども主体」に「子どもの学び」を創造したいと考えています。その視点については昨年の公開研基調報告でまとめています。

子どもの生活から出発する学習 子どもと学ぶ わかることの追求

真理を学びとる討論 共に地球時代を生きる仲間としての学習

鶴小では、こうした基本的な視点を鶴小のおかれた環境や条件の中で発展させる努力を進めてきました。わずか2年間の実践研究で、まとまったものが言えるはずはないのですが、今の時点での私たちの到達点をご検討いただきたいと願っています。

#### 4、生活勉強と『学び』

##### (1)「生活科」と和光の「生活勉強」

昨今の校内研究や教研集会などの実践報告を検討すると、次の3つの立場の違いが特徴的に見られます。

社会認識、自然認識系統指導の出発としての生活科

子どもの認識の特徴をとらえ生活科の内容や方法を工夫する。

この中には2つの立場の違いがある。

ア)学習対象や内容(年間指導計画)を社会認識と自然認識から枠組みする。

イ)学習対象のとらえ方を広く生活全般とする。

子どもがつくる生活科を志向する。

子どもの興味関心から教育を出発させ発展させ深める。

ところで、この3つの中には文部省の動向は入っていません。子どもの発達と学習の観点をめいた文部省生活科はかなり混迷を呈しているようです。生活科の時間を「息抜きの時間」としている現場教師も多いと聞いています。

上記のように分類すると、和光の生活勉強は と の両者にまたがっているいえるでしょう。現在の実践発展の方向としては、ベーシックとなる原則を明確にしつつ、いっそう「子どもの生活から出発する生活勉強」の方向で検討を進めています。

この3つのパターン分けは少々機械的かもしれませんが、「子どもの学びとは何か」「教師の指導とは何か」を考える論点として有効な視点のような気がしています。

## (2)子どもの学び (ゆうやから学ぶ)

生活勉強分科会のレポートは、この点について、実践の視点を設定しています。低学年時代に育てたい力として和光両小で重視してきた原体験で育てたい力を学びの側面から発展させています。

「昨年の基調報告では原体験で育てたい力として、”探り・わかる力””交わる力””つくりかえる力”、つまり人間性の形成につながる力としているが、それがもう一つわかるようで分らなかった。」「3つのキ-ワ-ドを一人の成長に照らし合わせてみていく必要がある」と考えた。そして、学級全体の課題としても『見つめる目、意識する耳、伝えあう口、経験する鼻、たくましい手』の五感をつかう生活勉強を重視した。」

(注) 和光の低学年教育で重視する原体験とは

人間形成の土台となっていく原初的な体験

豊かな認識の土台を形成する体験

原体験の重視で低学年に育てたい力

探り・わかる力 交わる力 作り替える力

学級に、ゆうやという子がいます。自閉症の子どもです。子ども同士の関係をつくれず、周りの子どもたちからは『まかふしぎ』とおもわれていたゆうやが、よもぎつみに行ったとき、「これはおもち?」「そう?」と何度も先生の腕をひっぱったといいます。ゆうやは

自分以外の誰かに触られるのを極端に嫌がる子どもなのに・・・きっと1年生を迎える会のよもぎ餅の喜びがあったのでしょう。

よもぎの葉っぱとりで、ゆうやは周りの子どもと交わるようになりました。お母さんは「今まで自然に目を向けることなど無かった子が、よもぎ餅を創るように要求しました。」と連絡帳を届けてくれました。

このことから、レポートでは、「ゆうやにとっては”探り・わかる”と言うことはほかの草とよもぎを見分けることであり、葉っぱの裏に白い毛が生えていることであり、”交わる”とは、自然に働きかけることであり、友達に関わることであり、”つくりかえる”とは、お母さんがおいしいお餅につくりかえてくれたことであった。」と、原体験で育てたい3つの力の具体化を、ゆうやの成長発達の中でとらえています。ゆうやにとっての「学ぶとはなにか」が見えたことが、1年間の実践をつくるきっかけになったといえます。

具体的な子どもを登場させて「低学年で育てる3つの力」を自己検討しています。

春にオタマジャクシをとることもできなかったひでひろ君が、生き物図鑑をつくらうという学級の取り組みの中で大きく変わり、虫探しや虫の餌などの話題で自信を持って登場する姿が書かれています。

せんせいあのね / ぼくのカブトムシにすいかをあげたら / カブトムシがあたまをつっこんでたべていたよ / よくたべたよ / すっぱいプラムをあげたらぜんぜんたべなかった。 / パパがあさぼくのおやつのおやつのゼリーをあげたらいっぱいいたべたよ。 / カブトムシもあまいものがすきなかな。

この背景には、友だちとの交わりの変化や家族ぐるみで日曜日オタマジャクシ取りに夢中になった生活があったということです。

よりえちゃんの家は中華料理のお店です。お母さんは中国の人です。「私はペキン語が話せます」という発表から学級の中でよりえちゃんのお母さんの力も借りた小さな異文化交流が始まりました。よりえちゃんが持ってきた中国語の歌に学級の子どもたちは大変興味を持ち歌いたがりました。今、テレビから流れる「ウーロン茶」の宣伝の曲だったからです。しかし、これは決して「ウーロン茶」の歌ではなく、『太湖船』という中国の古い童謡だそうです。早速お母さんから歌詞を教えてもらい学級で歌い始めました。今では、学級の歌になっています。よりえちゃんの発表で中国を知り、中国の歌で交わり、学級の歌に作り替えられる。このプロセスの中によりえちゃんと学級の仲間の共生が描かれていきます。

子どもの発表が学級の共通の学習テーマになることがたくさんあります。「似ている親子にでない親子」などはその一つです。この学習は、「カタツムリは大きいものも小さいもの

も同じ形をしているのに、テントウムシは全然似ていないだろう」という子どもの疑問から始まりました。また、「きれいな葉っぱコンテスト」から銀杏の雄雌調べが始まりました。

低学年の時期はみずみずしい感性を基礎にして身の回りの自然を見つけ、働きかけ、事実を確かめ、表現したり友だちと交流する。これらの過程が、いろいろな対象に対して何度も繰り返される中で科学的なものの見方や考え方が育っていくのではないのでしょうか。

### (3) 「子どもの学び」と教師

校内研究での2年生報告からは、『子どもの学び』を実践化するときの教師の学びが実に克明に読み取れます。

「職員会議の席で今年度の生活勉強案が出された。その中で子どもと教師、学級の発展によってクラスの実践プランができていく。その際、教師の得手不得手、方針が大いに生かされるものが望ましい。また、教師のしっかりとした意図と教師のルールから豊かにはずれる展開を取り込んでいける幅の広さを、とあった。正直焦った。」

「不安から出発した生活勉強はやればやるほど不安になり・・・(生活勉強の検討会で)畑探しから、旬の食べ物探しは子どもの発想ではない。逆に子どもの発想を狭くしていないかと指摘があった。このとき、自分の計画では、畑調べ、麦畑、麦、パンという考え方があったが、全部否定されたようで真っ白になった。2年生の生活勉強が見えてこないといろんな教師から実を的をえた指摘があった。」

「1年生の生活勉強の授業研究の後、改めて発表の大事さに気づいた。発表を子どもと共にしていけないに聞く、子どもの質問を聞く、その質問を全体に返すと言うことをゆっくりしたペースでやり直した。そうすることによって子どもの様子も見るようになるようになった。」

「麦からパン」の学習は、子どもが持ち込んだ麦の穂から始まりました。

「あっ米だ。」

「米じゃないよ。麦だよ。」

「麦ってなあに？」

「パンに入っているもの。」

「ええっ！これがパンに入っているの？」

「違うよ。粉になっているんだよ。」

こんな発表の翌日に、パンづくりの本が届きました。「きじ」という言葉をつかってパンづくりの発表をする子もできました。別の子が新しい麦の穂を持ってきました。しかし、麦

の穂とパンがどうしても結びつきません。麦の穂を一人ひとりに渡して殻をむいてみました。粉がはいっていると思っていた子どもたちは、「これはパンにならない。」と言います。持ってきた子どもも困惑しました。子どもたちの中に、「粉なんだから潰すんじゃないの」といって筆箱で潰す子ができました。すると、白い粉がぱっと広がったので子どもはびっくり。学級のみみんなも自分の粒を潰してみました。

こんな授業の時には子どもたちは感動的な記録を残します。

「本当に叩いたら白くなった。」

「叩いて、手が痛くなった。」

こうして、子どもたちが『著しく動く』生活勉強「麦からパン」の学習ができるようになったということです。

担任は、和光の教師になって日も浅く、生活勉強は全く初めての分野でした。教師自身が「子どもとともに作る学習」の醍醐味を「麦からパン」の学習で味わったわけです。

#### (4)本物志向の学びを

子どもの興味関心を大切にしながら、さらに新しい問いを育て、学習内容の質を高めるところに教師の指導の重要な要素があるように思います。いわゆる「活動主義」との違いを意識的に追求したいものです。

2年生の「麦からパン」の学習テーマは和光では伝統となっています。「植物としての麦」「粉の学習」「自分で作るパンづくり」「パン屋さんで働く人」「パンの原料としての卵や牛乳の学習」などなど、今までの実践の財産は豊富にあります。

麦刈りの時期から学習を始め(麦を植えた年もある)、麦刈りをして粉を取り、その粉でパンを焼く。秋祭りまでには売り物になる「本物のパン」を焼けるようになろうとその技に挑戦します。そして、祭りが終わると新たな学習課題を設定してパンの学習のまとめます。このプロセスの中で子どもたちはいろんな人と出会います。その年によって傾斜がかかる分野は異なりますが、パンづくりの実習だけでパンの学習を終わらせないことで共通しています。そして、その学習過程で様々な本物にこだわっている人に出会わせることも共通しています。違いがでてくるのは、そのときの教師と子どもの特徴を生かした授業づくりを大事にしているからです。

今年の2年生は、天然酵母にこだわった子どもがいたことで学習が深まりました。ひとりの女の子が、夏休みの「どかん(夏休みでなければできない大きな体験学習課題)」で手作り健康パンに挑戦しました。それがきっかけで、秋祭りのパン屋さんには天然酵母のパンにこだわる班の店ができました。

パンを作りながら、学級ではひとり一冊「パンの本」に取り組みました。もえとりょう子は『てんねんこうぼってなあに』と言う本をつくりました。目次は、「天然酵母の秘密」「どうしてイースト菌に変わったの」「天然酵母の特徴」「天然酵母はどうやってつくるの」「生きている天然酵母」「ふつうのパンとどう違う」「ピコリーノさんのパンの味」「感想」となっています。二人は、二人でつくった一冊本を発表しました。

こんなこだわりがあって、2クラスとも学校の近くにあるホシノ天然酵母工場（いろんなパンづくりの本には必ずと言っていいほど登場する名前）に見学に行くことになりました。工場長さんからたくさん話を聞いてきました。

子どもの活動を子どもだましにするのではなく、本格的なパンづくりに挑戦させること。粉についても、生地と酵母についてもこだわってみること。そして、麦づくりの農家やこだわりのパン屋さんなど地域に生きる本物志向の『プロ』に出会うことは、子どもたちの人間「感」・生活「感」が形成される上で大変重要なことだと思います。2年生なりに「人間の生活」が見えるとはこういうことだと思います。

#### (5)生活は学習の対象

生活を扱うことで子どもの生活態度の性急な変化を求める「生活科」の実践には、疑問を感じます。例えば、家族の学習には態度主義的な実践が多く見受けられます。家事労働を丹念に調べ、家族の一員として家庭で果たす役割を子どもに求める実践をよく見受けま

す。その教育は学校の課題でしょうか。親の家庭教育の課題ではないでしょうか。生活勉強は生活を態度形成の道具ではなく、学習の対象としています。諸喜田実践の「家の人の仕事」は親の苦労への感謝ではなく、労働を基盤にした人間の生活を見る（社会認識）の芽を育てています。学級の中には、「整骨医院」「障害児施設の先生」「家庭裁判所」「大蔵省」「商社」など、実に様々な職業で働いているお父さんやお母さんがいます。子どもたちは「家の人の仕事絵本」をつくって親の仕事を知り、親に共感します。友だちとの交流でお互いの生活を知り合います。

#### (6)子どもの学びと表現

「仕事絵本」「パンの本」などに限らず、鶴小では「ひとり一冊本」の取り組みがそれぞれの学習場面で取り組まれています。教師にやらされる固定課題と違って、子どもたちは実に能動的に取り組めます。子どもの表現から「学び」をとらえることが大事です。ひとり一冊本の実践のきっかけと、意義について小菅氏はまとめています。

きっかけは「夏休みの子どもの本」「詩集」などの子どもの作品を十分評価し、形にし

て親に届けてやりたいと思った。一人ひとりに調べやこだわり、自分の好きな世界を持たせてやりたいと思った。

子どもたちが持ち込んだものから始まる学習の延長にある。一人ひとりの花を咲かせる取り組みとして位置付く。

ひとり一冊本で心がけたことは、まず子どもの良さを見出したことだ。「あとがき」や「はじめに」などにメッセージを書き込んだ。

子どもの発見を受け止めた。子どもの発見として大事にした。

子どもの表現の中に『かなしさ』を受け止めた。ここへの共感が不可欠である。

子どもの調べ追い続けるテーマを大事にした。

子どもの一冊本は教師にとっては学ぶことが多い。

・子どものこだわりと納得を解く手がかりとなった。

おや、家庭が楽しみに待つ。

一人ひとりの個別性が生かされ、しかも作品が中間の中で交流され集団の中で輝く。

全員が一冊つくること。しかし大事なことは子どもを追い込まないこと。

私たちは、子どもたちの多様性に応え個性が十分に発揮される教育をめざしています。しかも孤独化でなく、集団の中で花開く個性化を求めています。ひとり一冊本の取り組みは、一つの子どもの学びの世界を解明するカギを示しているように思います。

## 5、知的冒険の時代にふさわしい学びを

年度当初、学校づくりの課題として次の3つのことを提起しました。

雑木林の開発を柱に、第2期和光鶴川小学校づくりを父母と一緒に進める。

入門期から少年少女期までの子どもたちのいる学校となる。ある意味では理想的な節目の学校かもしれない。子どもの豊かな発達を促す教育実践を過去2回の公開研を基礎にさらに発展させていく。

子どもの興味関心を出発点にした子どもの個別性と多様性に応える教育と、文化の本質に迫る「本物志向の学び」を関連づけて実践する。学びの改革と関わってオーブンスペースや名人達人の実践的發展を図る。

「ある意味で理想的な」という言い方をしたのは、10歳前後の節目はその後の思春期比べ、子どもたちの気持ちが真っ直ぐで、しかも行動力は高学年に負けないくらいあるので様々な学習が豊かにできる時期と考えたからです。さらに、この時期は、多くの人が自己の人生に影響を与えられた原体験を記憶している場合が多い時期でもあるので、どの子

にもかげがえのない学習体験をさせたいものだと考えたからです。

さてそれでは、「少年少女期の学び」が「生活勉強と学び」の時代からどう変化発展するのか検討することにします。

すでに3章にも書きましたように、昨年の基調報告では少年少女期の課題を「不思議の時代から冒険の時代へ」「やる時代から見通してやる時代へ」「知識の時代」「友達つきあいの時代」と特徴づけました。これを、「学び」の側面から深めることが今年の課題です。私たちはこの1年間、少年少女期の発達特徴を遺憾なく発揮できる教育実践とは何かを探ってきました。その中で、次のことが特徴的にまとめられると考えています。

知的冒険の時代にふさわしい学習を

能動的で活動的な学習を重視する。子どもはスリル・夢・ファンタジ - など未知の世界を探究する活動に意欲的である。しかも、子どもなりにやってみる、確かめてみる、まとめてみるなどの活動的な学習で個性を発揮する。

一人一人の個性的な知を共同するなかで知が深まり、人間理解も深まる。集団の中で個性が発揮され、共生の人格が育つ。子どもたちの「自分さがし」が始まる。

以下、実際の子どもの姿で検討してみることにします。

#### < 1 > 自由で個別な学習を集団で共有する

4年生の教室では、調べる活動の枠を広げて自由学習で取り組んでいます。ねらいは、自分で選ぶことで楽しみながら学習してほしい、調べることを通して興味の幅を広げてほしい、その楽しさを身につけてほしい、家庭学習の習慣を付けてほしいなどがあります。「家の周りの植物」「米」「米から作られるもの」「米のつく字」「米への漢字」「顕微鏡で見たもの」など多彩です。こうした自由学習は、総合学習や教科学習のテーマにも広がって取り組まれました。

「化石ってなんだ（総合学習多摩川）」「多摩丘陵小旅行（社会科）」「角度の1度はどのように決まったか（算数）」「ひとり2文字漢字博士（国語）」など、こうして調べてきたものは学級通信や文集にして子どもたちに帰されます。

子どもたちの自由学習が活発になると毎日一枚の通信では間に合わなくなり、特集を組むようになりました。以来、冊子の通信になりました。子どもたちは、冊子を渡されると読みあいます。しばらく沈黙があり、やがて中身についての感想がささやかれ始めます。教師は解説や評価のコメントを伝えます。子どもたちも冊子を大事にし、「通信が落ちでるぞ」などと言うこともなくなったと言います。子どもたちは、小菅先生を『教えたがり病』

とからかうそうです。こうした子どもの姿に「学びも自立」していくことを実感していると書いています。

子どもは限りない力を発揮するものです。夏休みの自由研究で、山羊の飼育をだれもが上手に引き継いでくれることを願って「やぎの本」を仕上げた子や50人の戦争体験者にあたって聞き取り集を仕上げた子などが出ました。

この活動は、低学年の「ひとり一冊本」の4年生版とでも言えます。子どもたちは教えてほしいという気持ちを持ちながらも、「先生僕たちだって調べるからそんなに何から何まで教えなくてもいいよ。」と言っているようだと教師はまとめています。

今までの私たちの学級実践の経験の中になかったわけではありません。「自由研究」「自分で課題を考える家庭学習帳」「生活ノ・ト」など個別で取り組む課題がありました。しかし、4年生の教室ではそれをいっそう徹底する中で子どもの「学びの自立」をつくりだしているのです。

## < 2 > 活動的な探求学習を重視する

### (1) 教科教育と「探検隊」学習

#### 子どものこだわりから地域が見える

今、地域は「開発と保存」のせめぎ合いの中におかれています。鶴川地域は今まで自然が残されてきている地域だけに、「開発と保存の問題」がリアルにとらえられるところです。教師の考える学習させたい課題には、開発と保存の拮抗関係の中で地域をとらえ、人々の生活をとりえさせることがあります。「開発と保存」は、地球規模での環境問題を考える本質課題ですから、これから高学年に向けて発展する方向を持っているわけです。

ところで、学習は、子どもの目の高さで、子どもとともに学ぶことが重要です。昨年の3年生は、学級に探検隊をつくって成果を上げました。「はひふへほ探検隊」は教科教育の分野でも学級文化活動の分野でも調査、研究、報告において奮闘しました。「探検隊学習」に、今年の3・4年生も自分たちの工夫を加えて取り組みました。

学校の屋上から四方を見て、なんだろう不思議だなというところを探検することにしました。北「飯盛神社」、東「化石山」、南「お寺」、西「鉄塔」と、子どもたちは探検場所を4方向に決めました。3年生は、『名刺』を持って「たんけん たんけん たのしいな」とルンルン気分が出かけます。かえってきて、新聞にまとめます。まとめた内容を見ると、神社のおじさんに名刺を渡して何かありますかと聞いただけだったり、和尚さんのおばさんに頼んで本堂に入れてもらったり、とたわいない中身ですが、担任としては地域の人と

の出会いを楽しんでいるところで第1回目の探検としては良しとしています。

石を投ざると必ず波紋が生まれます。鉄塔グループの子が「この奥に浄水場がある」という情報ももらってきました。早速、学級みんなで行くことにしました。ここは給水所の機能だけとなっていること。東京オリンピックの1年前にできたこと。学校のプール100杯分くらいの水が蓄えられていること。などがわかりました。学習はこんなふうに進展します。

2学期になって大探検とミニ探検を組み合わせで学習を進めました。大探検には次の4つの視点を与えて始めます。「人の集まる場所」「人の働いている場所」「昔からある場所」「めずらしい場所」。この4つの視点を持って地域を歩きます。西コースには、鶏小屋、工事現場、ガソリンスタンド、パン工場、養蚕農家、天然酵母の工場など見つけてきます。大探検で見つけた場所にミニ探検します。詳細は分科会で報告されます。

#### 温度たんけんたい活動中

理科でも社会科と同様なことが言えます。しかし、理科の学習では科学の系統に即して授業をくむことでこそ科学的な認識が育つと強調され過ぎていないでしょうか。教師は、理科の授業における「学びの改革」をそういう問題意識でとらえました。温度の授業の視点を子どもの生活と科学を結合する。子どもの興味や関心を引きだし、子どもから出発する授業の創造で子どもたちの学ぶ意欲を育てる。子どもがどうしても解き明かしたい問題場面を過大に据える。発見したり、わかったりした喜びを子ども同士が共感し合う場を教室につくり学習の共同をめざす。

理科の授業にも温度たんけん隊を組織しました。じゅうしまつの温度、水とお風呂の温度比べ、朝の温度、電球の温度、冷蔵庫の中の温度、霜柱の温度、犬の脇の下の温度など子どもはどんどん報告書を提出しました。

温度たんけん隊学習は子どもの能動性を引き出しました。休み中の箱根家族旅行の折り、小田原、強羅、大涌谷など1日の中で時刻と標高と海からの距離で温度がどのくらい違うか調べる子がでました。また、こんな温度計見つけたよと、教室の中が温度博物館のようになつたりしました。

子どもたちはいろんなことを調べ始めた。アルコールの線が切れた温度計で測るとどうなるか。/アルコール温度計と水銀温度計はマイナス何度になったら凍るのか。/温度計の歴史/塩水と砂糖水とミックスしたものの温度変化/土と水の温度の違い/水温度計について/等々大変能動的な学習が展開されました。

この単元の目標は、「ものの温かさ冷たさを数値化したものとしての温度」「温度計ではかることができる」「温度は足し算できない」と言うことですが、従来の授業よりはるかに

子どもたちの思考が活発に発揮された授業実践になりました。

子どもたちの身近な生活の中の温度から学習を出発させることで、子どもがびの主体になっていったと言えるのではないのでしょうか。

(2)子どもの身近な興味関心から今日の問題をとらえる「総合学習」

・総合学習「多摩川」

「教科の枠ではくくれない学際的な分野を学習対象とし」「身近な問題から出発して、知らず知らずのうちに今日的な課題に迫る」「レクチャ - を中心としないで、子どもたちが子どもたちなりに問題解決に迫る」学習と、私たちは総合学習を定義づけています。そして、集団的な学習として取り組み、自由研究と区別しています。授業づくりにあたっては、教科教育でつけた知識を生きた知力に転嫁するとともに総合学習での能動的な学びが教科学習の深化につながるようにしています。

多摩川での「生き物探しの大会」から始まる総合学習「多摩川」は、子どもたちの知的冒険活動にぴったりです。今の子どもたちは、いや、最近は親もそうですが、川のおもしろさを体全体で確かめられるような体験がありません。多摩川に行って、川に浸かって魚やほかの生き物を捕った快感が子どもたちの川への向い方を変えます。土曜日曜に魚捕りに出かけるなど、多摩川のとりこになってしまう家族が毎年です。2学期になると子どもたちはグル - プを作って調査に出かけます。魚、虫、花、鳥、化石、水、玉川上水など研究対象は多様にあります。子どもたちは生き物を追っているうちに「川と生き物」にとどまらず「川と人間の生活」の問題に突き当たります。4年生なりに、環境問題、川と人間の生活の問題をとらえることになります。そして、観念でなく、多摩川に身を寄せて多摩川の環境を考える主体になっていきます。

< 3 > 「本物」体験学習で子どもの原体験を豊かに

鶴小ではいろんな生き物を飼っています。3年1組は羊、2組は蛇、4年1組は山羊、2組は春まで牛を飼っていました。飼育活動は生き物を対象にしているだけに、生き物のリズムに合わせた行為が要求されます。相手を知り相手に合わせて行動し、そのプロセスでお互いの情の交換が計られるようになります。また、飼育当番は厳格に守られないと生き物の生死に関わる問題ですから仕事の責任についてきちんと考えさせられます。新しい生命の誕生の喜びもあれば、悲しい別れも体験します。

3年生では今年、6000頭育てたカイコが熟蚕する時になって次々の病気にかかり多

数を死なせてしまいました。こうした生や死は、子どもたちの心に刻み込まれる原体験としていつまでも残ることでしょう。

4年生は今年、近くの田んぼで米を作りました。田おこし、田植え、夏休みの田んぼの世話、稲刈り脱穀、すべてやりました。これもまた、かけがえのない体験と言えます。

## 6、子どもとともに創る算数

昨今の論調に、「今まではどう教えるかという研究は熱心にやられてきたが、それに比べると、子どもがどう学ぶのかという研究はほとんどなされてこなかった。」という論があります。

私たちは以前から、子どもを学習主体に育てることに努力してきました。目の前の子どもからかけ離れて教科の論理からだけどう教えるかを研究してきたわけではありませんから、今まで子どもがどう学ぶかに無頓着だったという指摘をそのまま認めることはできません。しかし、子どもを学習主体にするために教師がどう教えるのかということに研究の主力があったことは否定できないでしょう。子どもにとって「学ぶ」とはどういうことが、子どもはどう学ぶか、どう学びを発展させるのか、など「子どもの学び」についての研究の必要性を強く考えています。

「教え」と「学び」の関係を考えるとき、「教え」の中身がはっきりある算数を重点研究にすることで、研究の焦点を鮮明にしようと考えました。今年は、世田谷の和光小と算数部合宿を行うなど共同研究を進めてきました。

先に開かれた和光小の基調報告では、算数における「学びの改革」の視点を、次の6点でまとめた。(1995年第13回公開研基調報告)

子どもの生活から出発する学習	子どもと学ぶ	わかることの追求
討論	学習の個別化	学ぶことと習熟

鶴小では研究会のたびに授業研究をセットし具体的な授業検討と理論検討を併せて行いました。ひとりの教師が最低1回か2回、集団検討の素材となりました。

### (1)研究主題「子どもとともに創る算数」

鶴小の算数の今年度の方針は次のようになっています。

「昨年提案と研究の到達をさらに発展させる立場から、の点を深めたい。

子どもから出発する学習とは何か

科学・文化としての算数を子どもの視点でどうとらえるか。

子どもにとって価値ある教材、カリキュラムづくり

子どもが楽しく自主的に取り組んでいける習熟の追求

ところで、昨年の提案とは何であったかという、次の5つです。

子どもの目線から出発させること。子どもがどういう学習を求めているか、子どもの位置に立ってともに学習をつくっていく必要がある。それをどう科学や文化に結びつけていくか。

数理的処理で「算数の良さ」に気づけば、特にわからなくても良いというのが「進学力感」の考え方。それに対峙する実践をつくるには算数数学の文化としての奥深さを子どもとともにつかむことがポイント。

網羅主義を克服し、カリキュラムの主軸となる教材を洗い出し大胆な精選が必要。討論のますますの重視。

習熟の重視。それは内容の深まりであり、子どもの自己肯定観につながっていく。」

こうした研究を進めるキーワードとして「子どもとともに創る」算数を設定しました。

## (2)子どもに学ぶ

「子どもとともに授業をつくる」ことの条件の一つは、「子どもから学べる教師」であるかどうかがあります。子どもの様子を見て我が振りを直せない教師は子どもとともに学ぶことはできないからです。それではいったい教師が子どもから学ぶということはどういうことでしょうか。次の二つの場面で考えてみます。

一つは、1年生の教室です。7 + 9の問題の時、ひろし君が先生を呼んで、ぼくはこうしたのだとやり方を説明しました。7の中の6と9の中の4をつかって10をつくって16としました。先生はひろし君の考えを取り上げるかどうか迷いましたが、「ひろし君のはわざわざ・・・わかりにくいね」と取り上げなかったのです。でも後味が悪かったので翌日の授業でもう一度とりあげてやりました。ひろし君は「タイルだといいと思うけど数字だとわかんなくなっちゃうと思うよ。」という友だちの意見に素直にうなづきました。大事なことは、どの考え方も10をつくるためにいろいろ考えているんであって、「やり方は違うけどみんな繰り上がりがあるよ。」という考えでまとまりました。ひろしくんは、「せいはいきのうだめだっていったからだめかと思ったよ。」とほっとして先生に言いました。教師は自分自身が一番型にはまって混乱していたのではないかと反省しています。

もう一つは、子どもの発想の柔軟さに学ぶと言うことです。4年生の「角と角度」の学習ですばらしい発見がありました。手作り分度器で学校のあちこちの角度を測っているとき、一つのグループが「のり」の傾き具合のはかり方に挑戦して試行錯誤していました。教師も加わって工夫しているうちに手作り分度器でのりの傾きを測る方法を発見したのです。ほかの子どもたちはこの大発見に驚き感動しました。子どもの発想は本質をズバリと見つけるといふことに驚いてしまいます。

### (3)子どもたちとともにつくる算数文化

2年生の長さの学習では、算数の系統性をふまえながら、しかしそれに縛られずに、子どもと創る授業が展開されました。授業を進めながらたんねんに子どもの声を拾っています。教師は、子どもの声を録音して学級通信に再現する努力をしている中で、自分がいかに子どもに教え込んでいるか、つまり子どもの声に耳を傾けていないかを痛感しました。「子どもって教師のまとめをいやがるんだよね。さいきんきがついたよ。」としみじみ語っていることがありました。

この教室では、「学校の中にあるもので一番長いものを見つけてこよう。」という課題ではグニャグニャのビニールホースの長さはどこにあるかで子どもの熱い討論が続きました。もってこれないものでは、校舎やグラウンドのどこが長いかで予想を競いました。それを計る方法をめぐってやはり論議になりました。共通

の個別単位として、「はかりとりき」と名付けた1ヤードのきれいですてきな「ひも」をやると、子どもたちは学校中のいろんなところをはかりに飛び回りました。計ることが楽しくて仕方なくなった子どもたちと、学級特有の単位をつくり、それぞれに銘々しました。

まず、「はかりとりき」の単位は「はかピー」「ひもピー」 孝治の手を広げた長さは「コージ」 アレックスの足は「アシレックス」 鉛筆は「えんピー」 指から肘までは「ユビヒジ」などにつけました。子どもたちは、その単位を使っているんな長さを測りました。このように銘々するということは学級に公認された単位を表す文化と言ってもいいでしょう。子どもたちと創る算数文化とはこういうことではないでしょうか。

こうして個別の単位を学級内で公認した上で、世界に通じる普遍単位を導入しました。それに併せて、はかりとりきは「ヤード」というアメリカで使っている単位。孝治の単位は「ひろ」、アシレックスは「フート」、ユビヒジは「キュービット」と世界各国で実際に使われていたことを伝えます。そして、世界中の人が同じ単位で計った方が便利だと言うことでメートル法がうまれたことを話しました。文化としての算数を学んでいると言えないでしょうか。

こうした授業の展開に親も参加してきました。子どもも親も巻き込んだ、長さとは何か、どこに長さがあるか、という算数文化をともにつくる授業となったのです。

## 7、おわりに

和光鶴川小学校はプール付き体育館が完成し、ようやく講堂で全体集会をもてる学校になりました。1年に1学年増えるということは、新しい風が学校に吹き込まれるということで、様々な課題を生み出しています。少子化の進行の中で、安閑としていられない厳しい現実もあります。私たちは、今後とも「教育の和光」で父母の教育要求に応えようとしています。教師たちは、大変篤農的に仕事に打ち込んでいます。これが和光を支えています。みなさんの忌憚ないご意見で、研究課題を深めてください。